

第9回

君の人生におこる生と死の二つの
セレモニーで、「マイライフビデオ」
をつくろう!!

まず君は、お母さんや、お父さんの生きている記念ビデオをつくり、おばあさん、おじいさん、そしておばさん、おじさんのインタビューをビデオでつくろう!!

機材●ソニー½白黒ポータパック、ビクター½白黒ポータパック、ナショナルUマチック⅔、撮影時間30時間



アメリカの心理学者が書いた「ギャング」という本があるが、その中にきわめてビデオ的なビデオソフトづくりに必要とされる秘伝が書かれているのでそれを紹介することに!!

耳なれないと思うが下記の5項目である。

①ブレインビデオ (想像的に、計画立案を立てプラン通りにビデオソフトを作る撮り方)

②ジェスタービデオ (アドリブを用い、計画通りではなく状況を変化させながらビデオソフトを作っていく制作法。道化的で無責任でユーモラス)

③シッシービデオ (いくじなしのビデオ。とまどいながら、いつもグループを組んで、モタモタしながら、オッカナびっくりで作る、ビデオソフトの制作法)

④ショーオフビデオ (はったり的で、攻撃的で、挑発的で、ほら吹きで、空いばりばかりして、ウソ八百をならべたて、アクティブにスポーツのようにビデオソフトを作る制作法)

⑤ゴートビデオ (馬鹿まる出しビデオ。漫才的で、落語のようで、自分がバカになって、ふざけながらビデオソフトを作る制作法)

この5つのビデオソフトの作り方を自由自在に使いこなせれば、「ギャグとユー

モア」のきいた作品ができる」と書いてある。

しかし、それほどうまく行くだろうか? ビデオカメラとデッキを買ったばかりの諸君は、小生の言う意味がよくわからないと思うので、ここで、作家の井上ひさし氏がこれら5つのビデオ発想法をさらにわかりやすくするために、あの「ドリフターズ」にたとえて「味つけ」をしているものを再び紹介しよう。

ブレインビデオを作る時は「いかりや長介」風に撮ればいい!!

ジェスタービデオは「加藤茶」風に撮ればいい!!

シッシーは「高木ブー」風に。

ショーオフは「仲本工事」風に。

ゴートは「志村けん」のイメージで撮ればいい。

と、このように、ドリフのメンバーのイメージと発想の原点においてビデオづくりを空想すれば、ビデオの持っている「ギャグ性やパロディー性」が空想の彼方からみえて来るのではないかと考えている。

この井上ひさし流のドリフターズにおける発想法は、小生や諸君が「無意識」のうちに影響をうけている「テレビメディア」、つまり、テレビの人気者組(ドリフの8時だョ全員集合)のチームワーク

とドリフのスタッフにおける個々の個性からひっぱり出したものである。

そこで、今回は、はなはだしく想像的で、計画立案的な、ジェスタービデオにおける小生流のビデオの作り方を授伝しよう。

本誌(前号)でも触れておいたが、今回紹介するのは現在、ニューヨーク近代美術館を皮切りに6月から9月まで全米を巡回して上映を続けている「東京から福井と京都まで」というビデオ展に出品した小生のライフワーク的作品「マイライフ」である。

このライフビデオ作品を作ることになったのは、小生の田舎(熊本)にある、あの仏壇の上の壁にかかっている御先祖の写真をながめながら、この写真をなんとかビデオ映像にできないものかと考え始めたのが発端だった。小生は自分の父、母の代からは、あの無言の仏壇写真をひきずりおろして、仏壇ビデオにして見たいと思い始めたのだった。

そこで、さっそく1970年から、そのプランを実行にうつした。

1970年は、小生の長男が誕生すると同時に、長男の生命と入れかわるように父の死がせまって来た年となったのだった。

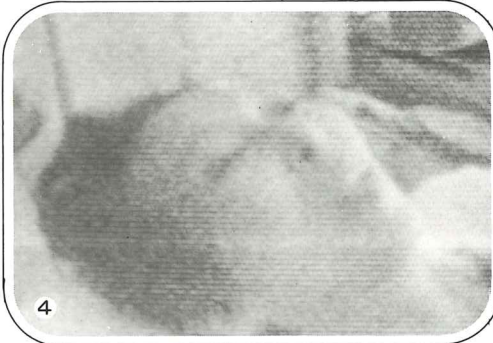
小生は、父の死と、長男の誕生をどうやって仏壇横のテレビのブラウン管にビ



①姉の子ども「れい子」。父が死んだことを意識したらしく悲しそうである。

②このお腹の中に長男が入っている。1970年の1月、麻布の写真スタジオに行く前の1コマ。

③父が死んだ瞬間。魂のなくなってしまった



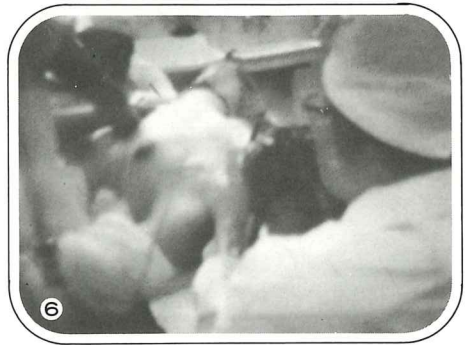
肉体と記念すべき1コマ、父は9時55分に地球から去っていった。

④母への最後のインタビュー。母はスースーと歯のぬけた声で小生のインタビューに応じた。真黄色で、サハラのサバクのような皮膚は粉をふいて薬くさかった。



⑤母の死に顔。黄黒色でナマリのように重い顔形で、さわってみたがもう「物体」であった。

⑥長女が出たところ。お腹はへこんだ。



デオ作品として写し出すことができるの
だろうかと、1人「色即是空、空即是色、
電即是空、空即是像」と祈っていたのだ。
女房のお腹がムクムクと大きくなるにつ
れて、父は刻一刻と死にいそぎ始めたの
である。

小生は、この2つの「生と死」のセレ
モニーをビデオ化し、仏壇にささげるこ
とによって、小生流の御先祖供養ができ
るのではないかと思ったのだ……!!

そこで、小生は、どちらが先に、死ぬ
か? 生れるか? ……を待つことなく同時
に撮影を開始したのである。お腹の大き
い女房を先祖供養だと言って麻布スタジ
オにつれて行き、裸にして撮影を始める
と、不思議なことに、「ウヘーッ!! イタイ
ーッ!!」といて産気づきおったのだ!!

小生はその様子をビデオにおさめると、
すぐさま、車を飛ばして産婦人科に向か
った。そして、その日の内に女房はマタ
の間から、スベーッと宇宙船の母船につ
ながっているヘソノオをつけた、羊水色
をした長男を生んだのだ。小生は、
その光景をブルブルふるえながら撮影し
ていた。

生れ落ちた長男は、灰透明で、緑ぼく、
うすいビニール袋のような皮膜をかぶっ
ていた。なんだかずいぶんうすぎたない
人間の生命の誕生であったのだ。小生は、
カメラのレンズをアップにして丹念に観

察し、ビデオにおさめた。

そして、まもなく……!!

長男の誕生をキャッチしたかのように
父の呼吸が急激に低下し始めたのだ……。
小生は、記録をしながら、父に最後のイ
ンタビューを試みた。しかし、生れたて
の長男のようなピチピチした肉体とは裏
腹に、もう父はドス黒く、冷たかった。
吐く息はバランスをくずし、心臓の心音
をつげる心電図の目盛はほとんど静止し
たまま、ときおり波形を描くだけだ…!!

長男の生れた時のドキドキするカメラ
の「手ブレ」とは、まったくちがった「手
ブレ」の実感であったのだ……。

父は死んだ!! 9時55分だった。

小生は、死んだ瞬間、父と最後の記念
写真を撮った……!! その行為は矛盾に
みちたものであった。しかし、小生は次
の世代に伝える仏壇ビデオのために、父
の最後の肉体と小生(29才)と一緒に写
しこむことによって、先祖における自分
の存在性と、記録精神の名において定着
させておきたかったのだ。

そして、世に言う「光陰矢のごとく」
地球が、ただ単に太陽を6回まわって、
6年目の冬!!

またしても、女房のお腹が大きくなっ
た。すると、小生の母がすかさず病魔に
とりつかれ入院したのだ。小生はまたし
てもビデオをひっぱり出して、女房と長

男を六本木のアートセンター写真スタジ
オにつれて行った。長男の時より腹はず
っと大きく、苦しい苦しいと言っていた
が、小生は女房と長男を裸にしてから、
インタビューをこころみただ。それは、
今しも生れそうなお腹の中にいる子供へ
のメッセージでもあったのだ。小生は、
この時、16mmフィルム、写真、ビデオ、
8mmの各メディアをフルに使ってこの様
子を記録した。あまりの長時間撮影で女
房は小生の計画立案通り「産気づいて」
いった。

小生は長男の時と同じようにあわてる
ことなくタクシーを飛ばして、産婦人科
にかけこんだのだ。

(この日、母は黄痘を併発していた)
小生と6歳になった長男はビデオカメラ
とデッキを消毒すると、白衣に着がえ、
分娩室へと入って行った……。

女房はカエルのようにひっくりかえっ
て、ウファーッ!! ウファーッと苦しみの
声をはりあげていた。長男がびっくりし
て、「お母さんを助けるんだ……」と攻撃
的に言った。小生は、写し続けているビ
デオカメラを長男の方へ向けると、長男
にインタビューをこころみただ。

——ケンゴ(長男の名前)ここはどこ
だ。

すると長男は、
——宇宙船の中だろうーッ!! お母さん



⑦



⑧



⑪



⑨



⑩

⑦長女誕生。オギャーと生まれ落ちたところ。

⑧1才になった長女。

⑨2才になった長女、まだ歩けない。

⑩3才になった長女。

⑪熊本の熊日画廊で開催した母の1回忌、父
の7回忌を記念した「回忌展」の際、ビデオ
カメラに向けてメッセージを言う小生。

⑫会場の1コマ。ビデオと写真と16mmフィル
ムを上映した。

⑬会場に来て小生のインタビューに答える父
の実弟、茂七おじき。

⑭この写真は父の心電図の波形、小生に残し
た最大のおくりもの、ビデオの信号のよう
である。

⑮ビデオに写った葬式写真にはビデオリテ
ィーがある。

をいじめる奴はチョップでやっつけてやる!!

とぬかしおった。……!!

女房はお腹の子供が大きくなりすぎたため、難産で、6時間も苦しみが続いた。小生と長男はひたすら、ビデオ撮りながら待った。途中で夜メシもくった……。そして8時間たったとき、力の強そうな白衣の看護婦が5・6人やって来た。そして、看護婦たちは、女房のお腹の上に馬乗りになって——1・2ッのヨーイシヨ—!! と大声を出し始めた!!

小生はビデオのシャッターを入れ、ピントと息と生ツバを同時にのみこみながらビデオファインダーに写し出された映像を見たのだ!!

ら線状の産道から大声をはりあげて、スベ—ッと赤黒い女の子が生れ落ちた。大きな子で4,800kgもあった。

母は、その日から、死に向かって序奏を開始した。

小生はまたしても、父の時と同様インタビューを試みた。母はもう、小生のインタビューに答える声を出すことはできずシャボン玉のはじけるような声で言った。

——小学校の時の先生が病氣しとる、みまいに行ってこんかい……あの先生にはお世話になったとばい……いっ

ておいで、ハヨー。

そう言うと、母は静かに眠った。そして、ときおり目をさましては……

——タコを食べたい……

と言ったり。

——シオコンプを食べたい……

とも言った。

小生は母の死の直前、ベッドの横に座り、ビデオカメラに向かって自己の現在の心境を語り、長男にもマイクを向けた。重苦しい心境であった。父の死のときよりもはるかに長く感じられたのだった。

母は死んだ!!

小生は、母を柩に入れ、火葬するプロセスを撮影していった。ビデオカメラのピントを骨をつかむ白いハシで合せて焼いた後の白い母の骨をひろった。ファインダーに大ツブの涙がこぼれた。もう、ファインダーの映像も見えなかった。

小生は、考えた。どうにかしてプレインビデオ通り、想像的で計画的に、この先祖供養のビデオ映像を仏壇の上の写真と同時に対比させて見せることができないものかと……。

1年後、小生は母の1周年忌と父の7回忌を迎えることになっているので、そこでその回忌を記念して、「母1周年忌と父7回忌展」を開催することにし、1977年11月27日から熊本市の熊日画廊で1週間の

ビデオイベントをおこなったのだ。

この回忌展には父方と母方の親戚を招集し、この7年間の母・父・長男・長女の記録を見せながら、父方の3人の兄弟にインタビューを試みた。すると、さまざまなことが浮き彫りになってきたが、その中でも、父の妹の伯母が母の死のビデオ映像を見るや、

——興ちゃん、こぎゃなこつしてッ、お母さんの死ぬところは撮って何んになっとネ—!!これがあんたの芸術ね!!こぎゃな人の死ぬところばテレビに撮るとばやめなはれ!!私しゃア—見るにしのびないかと——。もう2度と死ぬところば撮るのはやめなっせッ……ネ!!

と言って、涙でハンカチをぬらした。

小生は言った。

——ハイ!!おばさん、母の死は1回しか撮れません。

(この記録は今年で9年。まだまだ小生の長男や長女が成長して、20歳ぐらいになったときに上映しようと思っています。ビデオはやはり時間のかかる表現メディアのようです。どうか皆さんも、仏壇の上のあの無言の葬式写真をひきずりおろして、今すぐ、ビデオに向かって仏壇ビデオづくりを進めようではありませんか!!南無観自在菩薩。「チーン」

(なかじま こう 映像作家)

